

第26回国民文化祭
京都開催の基本的な考え方(理念)案

～これまでになかった京都ならではの国民文化祭に向けて～

平成19年3月
第26回国民文化祭開催準備委員会

京都開催の基本的な考え方（理念）

こころを整える：文化の基本形 Basics

京都で開かれる国民文化祭。これを機に、わたしたちは一度立ちどまり、次のように問いかけてみたい。経済・社会の激しい変化と地球を覆うグローバル化の流れのなかで、わたしたちは何かを忘れ、失ってきたのではないかと。そして、あまねく国民にとって文化とは何か、と。

家族で食事をするとき「いただきます」や「ごちそうさま」を言う人は6割あまりとの調査結果がある。また、レストランなどで食事をしたとき、「お金を払っているのになぜ『いただきます』と言わなければならないのか」という意見もある。「いただきます」や「ごちそうさま」ということばには、調達から調理、配膳にいたるまで食の用意にかかわったすべての人びとに感謝するとともに、食材そのものにも感謝するという、日本人の深い精神性が込められている。それは、わたしたちが日々折り目正しくあろうとして育んできた大切な伝統であり、文化である。

こうした文化には、ある行為、ある段取りをきちんとするなかで「こころを整える」という知恵が込められている。急須でお茶を入れ、墨をすって手紙を書く。それは単に、のどを潤し、用件を伝えるということのみではなく、“お茶を入れる”“墨をする”という時間を持つこと自体に深い意味を見いだすものである。

京都は、衣食住の様式から社交の作法、自然環境と調和した暮らし方を編みだし、さらにそこから、^{すい}粋を極めたさまざまな技芸・学問・宗教を生みだしてきた。日本という国が培ってきた文化・芸術の基本形が、ここには集積されている。国民文化祭の開催をきっかけとして、ここ京都から、ありふれた日々のいとなみのなかに文化の基本形を再発見し、日本の文化をふたたび創造性あふれる感受性豊かなものへと向かわせる潮流を生みだしたい。

文化を駆動する力 Creativity

京都は古来、開かれた地である。北は丹後から南は山城まで、京^{みやこ}とつながり、京を呼吸し、京とその外部をつないできた人びとによって、支えられてきた。また、たえず外の力、外の人流れ込み、その力が京をコアとしたこの地域の文化を駆動してきた。たとえば、^{いにしえ}古より先進的な文化や技術をもった渡来人の定住が各所に見られ、「平安京」が定められて以降は、各地の職人・達者などが京に集い、そこに京都の伝統産業や技芸、文化の礎が築かれた。その後も、海外の文化を積極的に吸収し、技を磨き、極めるとともに、世界にも類まれな「和」の文化を育んだ。外なる世界に開かれ、また内には先取・革新の気風を宿すというダイナミズムを、京都はその活力の源としてきた。

ここに生まれた文化・芸術の基本形は、日本文化の原点というよりは、人類が培ってきた世界文化の基本形の一つである。その核にあるものをこの国民文化祭であらためて探りあてることによって、激動する世界のなかで今後、日本社会がどのような生き方、どのような生活の様式を、全国に、そして世界に提案をできるかを考えてみたい。世界から京都へやってきたものを、次は京都から世界へ返したい。

21世紀における京都の役割 Responsibility

資源・地球環境の問題をはじめとして、高齢化社会、教育問題など、21世紀の日本はさまざまな困難な問題を抱え込んでいる。このような時代にあって、経済的な豊かさや効率性に代わる別の生き方、別の価値観、社会運営の新しい方式が求められている。

京都には、生活や行事・催事に四季のリズムがたくみに織り込まれ、歴史と芸術と宗教と自然とが日常の暮らしに浸透するなど、日本人のライフスタイルの原型が深く息づいている。これをもとに、来るべき時代を生き抜いていく知恵を見いだすとともに、地域の絆を再生し、新たなライフスタイルの提案をおこなうなど、21世紀の人類社会において京都が果たすべき役割を再認識するきっかけとなるような祭典をめざしたい。

国民文化祭は、ともすれば県・府民のための文化祭となりがちである。京都で開催する国民文化祭では、以上述べたような視点から、21世紀における文

化・芸術の基本形を目に見えるかたちで提示していきたい。「京都らしさ」にこだわることなく、人類社会の普遍的な価値を探り、そのために京都が果たすべき役割を明確に打ちだしていきたい。そのことが、これまでになかった、日本文化の粋が集積する「京都ならではの」国民文化祭の実現につながると信じている。

国民文化祭・京都開催への取り組み姿勢

京都には、各種芸道や舞台芸術、美術工芸など多くの文化関係者がいる。伝統技術を極めた職人たちがいる。大学で教え学ぶ研究者・学生が数多く生活している。世界に向けてメッセージを発する宗教関係者が多数存在する。府民もさまざまな習い事に日々なじんでいる。他方、日本海に面した府北部から奈良県域につながる府南部まで、日本の原風景とでもいえる四季折々の自然や里山があり、それぞれの地域には、豊かな自然環境と厚い歴史に育まれた固有の生活文化が息づいている。

全国からの参加者や、次代を担う府内の子どもたちに、さらにはその親たちに、京都が誇るこれらの多彩な人材や生活環境にじかにふれる機会をさまざまなかたちで提供し、京都の生活文化、芸術文化、宗教文化をたっぷり体感できるチャンスとして、この国民文化祭を、時間をかけて作っていきたい。

文化にも幼児期から成長期、成熟期、そして爛熟期がある。精神や技法を極めたものから、戯れに愉しむものまでである。それぞれが文化の、欠くことのできない位相である。国民文化祭（京都）では、地域・分野の別なく、プロとアマチュアの垣根を越えて、それぞれが刺激しあい、活性化しあうようないきいきとした交流を図りたい。

新しい文化の芽生えをこれまでになかった視点から創りあげ、発信していくために、文化創造のエネルギーの源であり、文化継承の将来の担い手でもある若者の力、さらには異なる文化のなかで育まれた外国人住民や留学生らの発想を積極的に採り入れ、かれらの斬新な発想や旺盛なチャレンジ精神を発揮するチャンスをできるかぎり多く設けたい。